

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520987

研究課題名(和文) 祭り囃子のデジタルデータ化と比較研究の試み - 徳島県を事例として

研究課題名(英文) Comparative Analysis of Festival Music with Digital Data : A Case Study of Tokushima Prefecture

研究代表者

高橋 晋一 (TAKAHASHI, Shinichi)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号：10236284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：徳島県の祭り囃子の比較分析を行った結果、県下のお囃子は大きく県北型(大太鼓1・小太鼓2・鉦2)、県南型(大太鼓1・小太鼓2・鉦2・大鼓2・小鼓2)に分かれることがわかった。県南にはさらに囃り物の掛け合いをともなう「拍子」、三味線・歌が加わる「祇園囃子」が伝承されている。いずれの地域でも複数のお囃子が祭りの場面に応じて奏し分けられており、お囃子が単なる伴奏ではなく、儀礼の進行や場面転換に大きな役割を果たしていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：As a result of making the comparative analysis of the festival music of Tokushima Prefecture, it turned out that musical accompaniment within the prefecture is roughly divided into a North-area type and a South-area type. The "Hyoshi" accompanied by negotiations of musical instruments and the "Gion Bayashi" to which a shamisen and a song are added are further handed down by South-area. Two or more musical accompaniment plays any area according to the scene of a festival, and it became clear that musical accompaniment has played the large role not in mere accompaniment but in advance of courtesy and scene conversion.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：祭礼 民俗 民俗音楽 デジタルアーカイブ

1. 研究開始当初の背景

これまで申請者は、徳島県全域にわたって祭礼・民俗芸能に関する民俗学的な調査研究を積み重ね、その結果を多くの調査報告・研究論文の形で公表してきた(高橋晋一「美馬市美馬町の祭り」と民俗芸能(1)」『徳島地域文化研究』8号、2010年、98-124頁、高橋晋一「阿波市の祭り」と民俗芸能」『阿波学会紀要』56号、2010年、185-191頁など)。申請者はとくに祭礼に出る「山車」の形態に注目し、徳島県下の祭礼山車をだんじり・屋台・小型屋台(よいやしよ)・船型だんじり・太鼓屋台・山鉾の6つのタイプに分類した上でその分布域を検討、その結果、山車の分布には明確な地域性があること、こうした地域性は県内外における文化交流の中で生み出されてきたものであることを明らかにした(高橋晋一「徳島県における祭礼山車の展開 - 文化交流史の視点から」『歴史に見る四国 - その内と外と』雄山閣、2008年、217-240頁)。

申請者はこれまでとくに山車の形態に注目して研究を重ねてきたが、調査を進める中で、山車の上で奏されるお囃子にもさまざまな種類があり、祭りの中でそれらが場面に応じて使い分けられていることに気がついた。また、そうしたお囃子の種類や使い分け、鳴り物の構成やリズムのパターンなどには、実は地域性があるのではないかと考えるようになった。

祭りのお囃子に関する研究は、これまで民俗芸能研究、民俗音楽学の分野において主に取り上げられてきた。特定地域の祭礼のお囃子の楽曲構造に関する研究(岡田睦美「藤沢市の辻堂諏訪神社における祭囃子」『神奈川囃子』の音楽構造」『民俗音楽研究』34、2009年、25-35頁)、祇園囃子など特定の種類のお囃子の地域間比較研究(田井竜一・増田雄「『祇園囃子』の系譜序論」『都市の祭礼』岩田書院、2005年、79-103頁)などが見られるが、都道府県レベルを単位として祭り囃子を網羅的にデータベース化し、そうした広域の空間の広がりの中で(さらには県境を超えた地域間の文化交流のあり方も含めて)データを比較検討し、そこに見られる「お囃子文化圏」を抽出しようと試みた論考は見られない。本研究は、「お囃子」という祭礼文化の地域的な展開過程を空間・時間的な広がりの中で実証的、立体的にとらえる新たな視点を導入しようとするものである。

い。

2. 研究の目的

本研究では、徳島県を事例として各地の祭礼の「お囃子」のデジタルデータ化を行い、そのデータを名称・鳴り物の構成・奏法・リズムパターンなどの点から比較検討することを通じて、県下の祭り囃子が持つ構構性の特徴を明らかにする。その上で、お囃子その特徴からいくつかのタイプ(サブタイプを含む)に類型化し、その地域的分布を検討する

ことを通して、地域における「お囃子文化」の展開過程を明らかにすることを目的とする。このように、本研究は、「お囃子」という祭礼文化の地域的な展開過程を空間・時間的な広がりの中で実証的、立体的にとらえる新たな視点を導入しようとするものである。

3. 研究の方法

徳島県下の約100地点を選定して祭り囃子の調査を進める。現地の関係者にお囃子の種別と奏法、使い分けなどに関する詳しい話を事前に聞き取った上で、祭礼当日現地に赴き、お囃子の演奏の様子をビデオ録画・写真撮影する。それぞれのお囃子を採譜、その構造をパターン化した上で、お囃子の名称、種別、鳴り物の構成、奏法、リズムパターン等の点から地域間のお囃子の相互比較を行い、その地域的分布を検討することを通じて、地域における「お囃子文化」の展開過程を明らかにする。

4. 研究成果

「鳴り物の構成」という観点から見ると、徳島県下においては県北・県西(大太鼓1・小太鼓2・鉦2)/県南(大太鼓1・小太鼓2・鉦2・大鼓2・小鼓2)という二つの大きなお囃子文化圏が存在することを見いだした。県北の基本形(5人乗り)に、県南ではさらに大鼓・小鼓が加わったと考えることもできる。ちなみに、県南・県西は引くタイプの山車である「だんじり」、県北は担ぐタイプの山車である「屋台」が優越している。県北と県西は山車の形態こそ異なるが、お囃子(鳴り物の構成やお囃子の楽曲構造)という観点から見ると、文化的連続性があると考えることができる。

県北・県西地域のお囃子は鳴り物の種類が少ないこともあり比較的シンプルで、大太鼓・小太鼓・鉦が同時に一定のリズムを繰り返す形を取ることが多い。一方、県南地域のお囃子は、大鼓・小鼓が入る分かなり複雑化している。「地」と呼ばれる、大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓で同時に奏される単純な反復リズム(ユニゾン)に加え、「拍子」と呼ばれる、鳴り物同士の複雑な「掛け合い」のあるお囃子が存在するのが県南のお囃子の大きな特色である。

「拍子」は1サイクル奏するのに5~10分ほどかかり、「地」に比べ習得も難しい。そのため多くの地域では打ち方を記した「譜面」を作成し伝承に当たっている。拍子は御旅所や巡行の道中で、神輿やだんじりが比較的長い時間止まっている際に奏される。基本リズムの「地」に比べ技術を要するため、観客に「見せる」「聞かせる」お囃子としての性格を持っている。こうした「拍子」は県北には見られない。

県内のほとんどの地域では、お囃子は氏子の小学生(基本的には男子に限られるが、近年は女子も参加している)が担当するが、那

賀郡・勝浦郡の一部地域では、大人（青年）がだんじりに乗り込みお囃子を奏することもある。これはお囃子の複雑性とも関連するものと考えられる。

県南の一部地域（約10カ所）には、「祇園囃子」と呼ばれる三味線や小唄の加わるお囃子が伝承されている。先に触れた「拍子」がさらに複雑化したもので、演奏時間も1サイクル30～40分程度と、相当に長いものである。京都から伝習したとの伝承を持つ所が少なくないが、鳴り物の構成は大太鼓1・小太鼓2・鉦2・大鼓2・小鼓2・三味線1といった形で、京都の祇園囃子とは鳴り物の構成もお囃子の楽曲自体も大きく異なっている。むしろ各地域に伝わる土着の「拍子」を発展させたような楽曲構造を取っていることから、徳島県の祇園囃子は「京都由来」という伝承にもかかわらず、地元で創作された可能性が高い。実際、上勝町に伝わる祇園囃子は、文化年間に地元の氏子が作ったとされている。

なぜ県南地域にのみ祇園囃子が分布しているかという点については、近世阿波の代表的な娯楽芸能である阿波人形浄瑠璃との関係を考慮に入れる必要があるのではないかと。徳島県内では近世後期以降、人形浄瑠璃を演じるための「農村舞台」が各地に建てられたが、その分布は県南地域に偏在している。県南には村持ちの人形座も少なくなく、地域の人々が人形を遣い、三味線を弾き、浄瑠璃を語るという文化があったのである。こうした人形浄瑠璃の「語りの文化」の影響で、特に県南地域に（歌や三味線を伴う）祇園囃子の文化が広まったとも考えられる。

これらお囃子の「二大文化圏」に加え、「太鼓屋台」「よいやしよ」「御神楽」と呼ばれる山車が出る祭りでは、山車の中央に縦に据えた鉦太鼓を、そのまわりに座った4人の打ち子が同時にたたく。「太鼓屋台」の分布は県西部（三好市池田町・山城町の一部）および県南の海部郡の一部に見られるが、これらは伊予（東予）・讃岐方面、もしくは阪神方面から近世以降に移入したものである。「よいやしよ」は県北の吉野川流域に点在するが、とくに鳴門市では現在出ているほとんどの山車がよいやしよである。「御神楽」は徳島市を中心に、小松島市、阿南市の一部にも見られる。鳴り物が太鼓1つだけということもあり、「御神楽」と呼ばれる打ち方と、「とことん、とことん」という単純なリズムが中心で、お囃子という点からのバリエーションは少ない。

県東の沿岸地域に点在する「船だんじり」については、基本的に一般的な「だんじり」に共通する鳴り物の構成と楽曲構造を有している。海部郡海陽町久保（旧穴喰町）・八阪神社の「山鉦」で奏される祇園囃子は「お能」とも呼ばれ、太鼓・鼓・笛に謡いも加わるきわめて特異なお囃子で、中世の風流囃子物との関連性が想定されるものである。同地

は京都とのつながりが強く（山鉦と呼ばれる山車も、明らかに京都の八坂神社の鉦の影響を受けている）海を越えて伝来した文化と考えられる。

以上は各地のお囃子を比較する中で見えてきたことであるが、個々の祭りの中におけるお囃子について眺めてみると、お囃子は単なる「伴奏」ではなく、祭りの具体的な進行や場面と大きく関連していることが明らかになった。たとえば、美馬市木屋平八幡の新八幡神社祭礼では、だんじりが止まったとき（神職が拝むとき）には「御神楽」、動き出したら「道中」、神輿が神社に戻り祭りが終わる際には「打ち切り（上がり）」と呼ばれるお囃子を入れる。那賀町木頭折宇の八幡神社祭礼では、だんじりが止まっている時には「チキチン」と呼ばれる基本リズムを打ち続けるが、そのほか、神輿に御霊代を遷すときに打つ「カミウツシ」、神輿が御旅所に着いた際に入れる「カイカイツクツク」、掛け合いのある複雑なお囃子である「拍子」、神輿が神社に戻る際に打つ「お入り」といったお囃子がある。だんじりの動きが速くなる時にはお囃子もスピードアップする、ゆっくり動くときにはゆっくり打つ。

「御神楽」と呼ばれるリズムのお囃子については県下全域で見られるが、これは神前で神職が祝詞を唱える際に合わせてたたく太鼓のリズムと対応している。神輿に御霊代を入れる際や神前などで打つのが基本であることからわかるように、神事性の強いお囃子と言える。

このように、お囃子は祭りの場面に合わせて切り替えられ、祭りのステージが転換したことを明示するとともに、祭りの進行を参加者に体感的に意識させる装置としての役割も果たしているのである。

なお、近隣地域の祭り囃子を比較してみると、お囃子の種類・リズムパターン（楽曲構造）・お囃子の使い分けについて、強い共通性が見られる。しかしまったく同じお囃子というわけではなく、楽曲の流れの一部が欠落していたり、テンポが変わっていたり、アレンジが加えられていたりなど、神社によって聞き分けることができる程度の差異は見られる。これは、近隣の（中心的な）神社のお囃子を模倣し、さらには地域の中で長期的に伝承していく中で生じたヴァリエーションと考えられる。

特定の祭りの中でのお囃子の採譜、「木遣り歌」や「祇園囃子」など特色ある祭り囃子の地域間比較（伝播と変容に関する研究）などはこれまで断続的に行われてきたが（植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼』岩田書院、2005年など）調査対象地域に都道府県という広域単位を設定し、網羅的・体系的に祭り囃子の収集を行い、それらを比較検討、分析を行ったケースはみられない。本研究を通して、徳島県を事例とした「お囃子文化」の様相が空間的に浮き彫りになったが、こうした

視点をさらに広げることにより、よりダイナミックな全国規模（さらには東アジア地域を念頭に置いた）の「お囃子文化論」の構想につながっていくであろう。

近年、過疎・高齢化・少子化が進む中、各地の伝統的な祭礼が次第に衰退し、祭りに山車が出なくなるケースも増えてきた。山車が出なければ祭り囃子も奏されなくなり、いずれ伝承が途絶することになる。こうした状況において、各地の祭り囃子を網羅的・体系的に調査収集することは、貴重な民俗文化財の記録・保存という観点においても大いに意味があることと考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

高橋 晋二、三好市西祖谷山村一宇・平崎神社祭礼、徳島地域文化研究、査読有、No.12、2014、pp.86-99

高橋 晋二、美馬市木屋平（旧美馬郡木屋平村）の祭りと民俗芸能(2)、徳島地域文化研究、査読有、No.12、2014、pp.58-85

高橋 晋二、美馬市木屋平の祭りと民俗芸能(1)、徳島地域文化研究、査読有、No.11、2013、pp.116-150

高橋 晋二、板野郡板野町の祭りと民俗芸能(1)、徳島地域文化研究、査読有、No.11、2013、pp.96-115

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 晋一（TAKAHASHI, Shinichi）

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号：10236284